七

漢人名録　女中の巻

巻七

日仁9
2067
6

2067

十巻之内

松平左兵衛

早稲田大学図書

續人名巻七　女中の巻

釈注恋

一世の中は風俗はさ海くよりうけるまゝ
うハむしうらうとうとうゆゆうまとべ
ていみ〳〵の女ハ髪のりてうたとしを
きとにしてあるうへうまかゞと入
ゆくやうゆひなし髪のくるまかうと
ゆくまうも毒うくかうとの毒

もがぞなとのまつぼくとりひろ
のまつふぎくしくめてゑとれ
かかのこつくへ屋さくまれなるこの
かうこもいよいよまくとりとりけ弟い
中まぐなるとうこうこうおびいむ
さたちうのんのてぼそとむすびてケ
術のかうちおぐやうふそぐなるふるう
しこも去年は今ふむうふうる女中乃

風俗けやくしくうけて町方の女中ハうく
の多きとさくひやうぐる紀餐の中とそ
さくうくれゆひひやういとそふくく元法
さいといくきのくくうちとけうきぶ
おびくくしく出くうろ紀ち発し
て中と割ちつもしうの生へ中綴と出し
ろうのくくさハこ思すうきいけきうハ
くづうきろう紀なぐくんきんくうるくへ

まさごのうへとほうされけて引かけ
ひらねのうへにさふれたるひあしらひ
しくめうらそてにねみくつをもてはし
めふたのりこむもんと美きやぬいくろぬ
しくうらはうよ色くしに式は表ともしぐ
さして表よぬひしやうの小袖まさは八寸
ものうちんすそもうらあうく袋
ものうちの外うらよ裏のふきかくし出二ツ

かうものひとつまくに茅むかるよしメ糸ぐけ
のうち茅屋へ引うけびらくじ弦の文
板うらはみごどうとと素ぬくような
なしすそ出けいてあもしけいるされう
ゆふ女房しやのみちんよひくく又は二
三のうち紀女中ぢぶいて髪ともむすひ
馬こそそ又はうらやかりんなどのおる
てよかもんど柴のうしと対ケもぐのやうな

第一ハ[illegible]けのこと[illegible]
ようめきてうくとよおくれ[illegible]きに情を
あまぐ[illegible]ものかとらかと[illegible]おもへと
さハなくては風俗とまれとひ輝くつ
てつぐんうふるとのむとくへくれて
年振の月うらくまる女は英月とくく
かのかれこくとくらのおくねのくん
ゆしきまくまくぐまんのまくしぶ振ゆう

又早よ中くこの[illegible]のくろくとく
けせくしびんのくまたぐの出振いむ
くとおしまけハえもひきハくはすが
くうよ切まくぐまあ面のくとぐおくぐ
文のかくぐの第一ワわんくくに匂ひれ
ゆ舞るあくきとくすくよ中わきの
ぐくまかくとくぐ生糸のむくと
まくふ風情なるゆう又振かハくまく

もちうちかくるめりさてよそひんな髮とゆび
神ハうけひしくもくまにすく波
入しなりにたちうにらへされく神ま
のとくきてまさ石つうひの女ハあほくの
ひんとうの山くさうさ海ようきいけ浦ちう
月のちくうけて紅ふくあちう首級の女帝
ちいひつぐさうはよ仕三髮ハうまとゆう
いさづうちけ毎ゆんよゆひかれぐひろき

第八居表ちまきうけ第乃むすびとこよ
して之しれかつ海ぐくするもいうそぐ
ちふまうくまもの女役者の風と似也
ぐうかうかてかとこのかりひつくゆかとの
ひうくいろくこうまにようそかひかるるまれば
れりのかりまひ女中うはうけてつく
ふくうれうきてよかりひけし
一いあ〜へのふうとくハ世至のまにとるかと

なるとよりしてかたちもなども
うつくしくらうたくおとなびさま
けいひいとうとくなびきたいらかにも
うすきぶんしはゆるしてそきこと
きわめてしかるべくはまへよりはなれ
こうしてなをしてはしりかたちは
つゆすこしはうすくしてうつくし
くとうしまはさしてはしりかたちは

あしくかいろのうつくしうおかしうすしぬと
はゆるはうすくりてまはうくしはは祖父の
ずしかくよりはくべしこうりく
引めくうあしあるのうたてるまや
しくつんぐしぬはあるべしさくく
きのどくなるとはりまはひとえ
まるしのぬりにあくしはりたりく
つんくはとどくてよくずちくとんくらは

むくへてしるなる間もとかどをたてゝ
ゆくゝ行くゝ居るげうらはひくゝもようかう
家なるゝ人もしひるるて人とん上間
つうひすくゝうしびはゝもくゝ川はもうゝ
しもうしゝ行かておしくてもくゝもくゝの
又くぬ振よわくゝ家べしとあれあるゝ川
かつくゝうわくゝひとくゝれくゝれくゝかくゝ
もくゝうかいやくゝあくゝもくゝくゝうハ

又ふくゝ者ハうくゝうくゝもくゝくゝうくゝ居家
ようけくゝうくゝもくゝくゝかくゝけなくゝさはし
かゞなびよ伊勢のくゝハようくゝうくゝ年お意
のくゝ振けくゝべくゝいかくゝへのくゝ神ハ一人八寸
なくゝようくゝうくゝふくゝハ今もくゝうくゝへのくゝけと用
ひかくゝひくゝゆくゝゞハくゝてくゝくゝれくゝてくゝのくゝ
くゝなくゝ行くゝれくゝうくゝかくゝつくゝのくゝうくゝくゝすくゝうくゝ
くゝしくゝのくゝくゝくゝハくゝうくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ

いやしきあるく附きとそ成けゆ一さきゆうハ
よゆりなとの月ん面ハよりあ〜風情女の
そでなりハ色あ〜りれて注ゐ見とべて
女はたらしく和ゆ面げなるぶよ〜れて
おどろく附のうれつきいるとさのけ〜き
ろ〜ろ〜おそろしくかたのあるとけてつ
〜ミゆふへし行ゆくちゆ〜ゆ〜ゆ
さらつゆるまひあ〜くゆのけるあしくさい

きしあるあるあるあるつ〜ミのしく
かろきりのなどうハさそ〜ミあさ記さる
あ〜さあてい〜く繁るみ〜しいるゆ
ゆうゆるるあくあくあく

和へ出ふおうんてハさやうう〳〵のまうし
ものとそうぐう高ひりんさやうろく
ぐんとおどの節とむすびてくしちやと一つぬ
うのこのちうんのうーあびさーしの足袋
よみう孫のもうとときは又譬のまへハ
きいまいのうーうぐいとさーら人ちうハ
ようしさうぐくとうとうとうとハみうん
ちれやうびうとうきのうとうみんハ

元親〳〵のふりてもへ親のさもつあるも
さもその身もなうすうこ高〳〵ハ法令ハ親の
身よへつき事こむ親もお夏の衣類ハ
あてぐひ池元結たぐこうの紙くのへ
ひりどの小せもあてうふへさうれもも
かほどの身の只うーうーい命〳〵て
のへせひかハあうへうーひ高〳〵ハ仙のと
りてうどの身の只うとすぐ〳〵いのよ

是皆ほうこうにんの代あるいハ祇園住乃
ひとゝそのかゝうそのゆうひのホとうゝ
或ハかやぐうゝふの神んさの寺さいのく
あゝゆるいつゝゆゝまへてらごとりゝけ
る人とゝいうゝるとゝひ茶屋中
宿ゝて出合そのかゝ二番よれやゝかうホを
親のうゝよハ一歩ゆるもゝゝゝして
うゝのこれのゝまゝ歩の方ゝいつゝひ

ゝうなゝゝびゝうゝ時ゝびあるゝゝれのかゝゝ
よ身ゝとゝせゆゝ安貞おのてゝらごにゝけ人
の池ゝと言ゝゝてゝうゝくゝきてゝゝ歩
身のゝゝゝ又のゝゝ毋乃ゝあよ身ゝゝる
けいせいゝなゝゝと孝りゝのつゝあゝれて
よかゝゝゝゝゝはいひゝゝ天ゝの恵ゝ
あゝ形んゝれゝゝハゝくゝ又ハ宴ゝ
夏言の月ゝいゝゝ寺房よ指ゝゝけてゝゝ

あさなゆふべ日とりし毎ハやとりてとり
ゆきのやぬちんゆ事とゆくゆくゆく
その日とあくれもあやのさきあふすらいろ
なくハやうてのゆ事しもおりりんぐ中くたれあ
ゆいなくけくしてとの生ら分の主ろりく
親のいやしきとゆくひ親の中ハ義中と
おりひつもひハうくてもうんびさぐんくよく
とたつるれく信のつとうしやそんくくの

おそうしきとおりひつけびあやくくとの
おりしうふまそくハあくぬさ毎ゆ分とうし
なふりの世ゆ中ゆいくくもあるくくさ生ハ
うやつくくとる女中ハぢいぢん分のりく
とうくくとくくさくハくくあくくもうんくとう
る風俗あくくくびゆ分とつくくくる
人のくくあとおりひうふもわくくしのつと
りくでゆとおくくびあやくうあてくひの内くも

つゝひ延し又人より賜はるものゝ
なきことになるべき生れよりあること
親よりうけたまはるの大恩
と存ぜば一度かゝる世に出て女子
一生親の世話よりの外なれば中々一世を
うゝて親の恩はおもうもしれもひん
女の一ことゝもてのくるべきのなり
ゝも又母へ心ざし信とつくさるべきの恩

廣大なる父母の心をもなくうたん恩のもくひ
ゝも成へしまさかくのゆうふ人へ
つゝめもまことにうてるのゝ心もるひ天
のきりつくるその身はいきうる身成
ゝてうるやとゝもゆゝ屋なるまゝ
なるへしうもくるも親と大切はおもひ
のゝへしその内まるの恩は親ゝ戸
は成ゝ身のゝう親へ孝ゝる所のゝう切実

とん親くともやしなへども終にかくなるべき
大恩こゝ以下くのなき人とそもその身代
金とんおやの事をけとなセハ理ハあるし
事こゝ人へよくつく身とゝ所まて
とゝも事こゝ親への孝りくよくゝ
まくのひ事ゝ身代孝とゝ孝のゝし
女は女のゝくつくものゝへまとゝ
事おとこの大義とゝ同ゝる

されとゝの出家ゝ仏の出ても変あるゝゝハ
わゝ身ゝくへゝ出ゝ人とゝゝ或ハ夫事
なゝのゝ出もわゝ身の法乗とゝ
出ゝ人のゝくとゝつけゝ貴ハ
まゝ出ゝいゝくゝまくのゝ出身
ゝ人命ゝくてもゝくゝ出ゝ人ゝの
いゝとんゝのひてんゝの出ゝまゝ
くゝゝひいゝなんかてゝの身つゝ

なくすゑのゝうへめてうらんとうたうひ
あるへうしびこれるこの事ハかゝるゝ
されとやうしてどうてんあるまれなりけ
ゝ仏のゝくふうくはうくもうんけくらうし
りてその四ケあるへき事うんようふく
おりうまりしふぶんハ仏のどうものやうう
ようしてうゝのゝ仏を聞よりつとまれ
ようきハとやりしようゝ仏無へうもし

一出屋敷ハ町方ハ屋敷ハ町方ハくも
その部ゝ法度として人ゝ中ゝ法度ハ
仏ゝ仏ゝ仏ゝ仏ゝ仏ゝ仏ゝ仏ゝ
あるへうしあるひいりうん中ゝいるる
新しきゝかゝなる仏つゝゝ方
ゝれハ出屋敷ハ法度ハ中
かてゝとも稀ハあるへうくハ書
ゝりくゝ町方ハ屋敷の出内方屋

うしなはせ給ハ仏法のおきてにそむきたる
ことなりとて常々申されし
角力取申すもうしびんまさ
中居うしろへうつる角力取
ちかまるひのうぢ常々申されし
実くらるつねひとふまのき
常あんようおかしひりし
一とよりうしろ女中ハうけて慈悲なるけ
ぢ

ちうしめうものハひとつふるものうちぐ
りのかくあり申ずいぶんくく
ひとはいうちうぢ紙ひうちうぢ申かてあし
申ル人よりうきしすちうとなけ
ちハ中さびんすきしの心入そそのの
りのなんぎものれ又おろうち人乃
びうなうちうものうちひいうち
ようりうなどいきりしつく

りてこれを[illegible]とほくてとびあまさとはる
るのよりとく稼方のはまへてうてるに
事かくもはなれんこちの仰あればはるこ
のなりをかくはるこふかしふるかく
とうかさるとてもんようはるこるかく
りのはりしきこと
一也して女の西事八十ゞ十百ゞ百ゞ欲ゟ
おこるものかくはるこふかしふるこ氏二ふと

かくれのこくかくれへしまた海ハくる欲
の中ゟくなるりのまへハくれまつしと
なのへしし女中の大海ハくるけてこそ多く
なりくもぎもあくこくれこぶしく新海大
し米こるわくひいつまもあいそつきてもつ
しこうり事小おりまいこれくの事
よういろくの西事へうりてはまこれも
はつくしこ男一のりまよあくしまいし

完了

さうつきなくひとりまつ人

ちとせ経るこの世にうらぶれて

立わかれくるるよりゆく

すゑの世うらぶれ人のなりはて

續人説七終

弾列傳法刊

保福寺

信秀